

9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30

JAPAN



江戸歳事記卷之壹春之部下

二月



朔日○日光久能山御境檻御頂戴 上野園山天台宗院御芝城

中丁日○湯守智堂

シマクチニ
斎奠

庶人ハ洋すより先聖先師九哲とまつる。又室は六君子

朱文公より本邦斎奠の始オキナフの画像と掛かる。程明道、程頤、邵康節、張橫渠、周濂叔
斎奠の礼は佛寺の如く、文武天皇大宝元年より吉備太臣入唐の後、洞元よりく
と並に一夏と經營して先聖先賢十哲の像と垂る。先聖殿と曰ふ。元禄四年正月廿四日
接され年々斎奠の式を重ねる。斎奠の制度をあると云ふ。

儀塾集七甲子仲春詣江都上野先聖殿觀釋奠

今曉初觀先聖殿杏櫻春雪更清鮮笙簧鼓樂融和至黍稷粢盛芳

潔連三聖明如在上六賢翼翼似臨前懲懃拜于兩楹下且喜儒

風吾國傳

奉中行事合

うそりとのかへあひうけとうらうらひうれしと人々參りゆり 二位中將

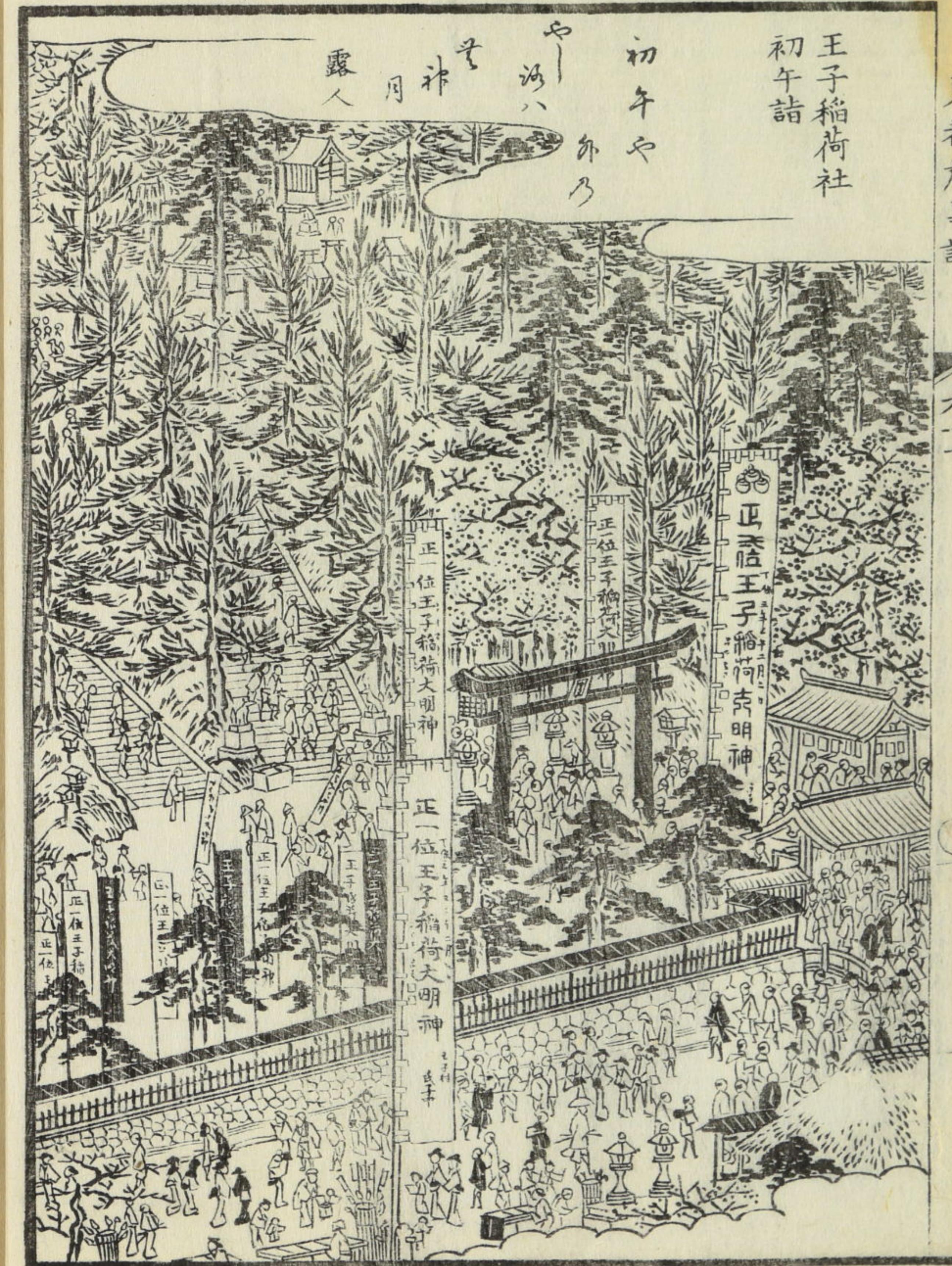
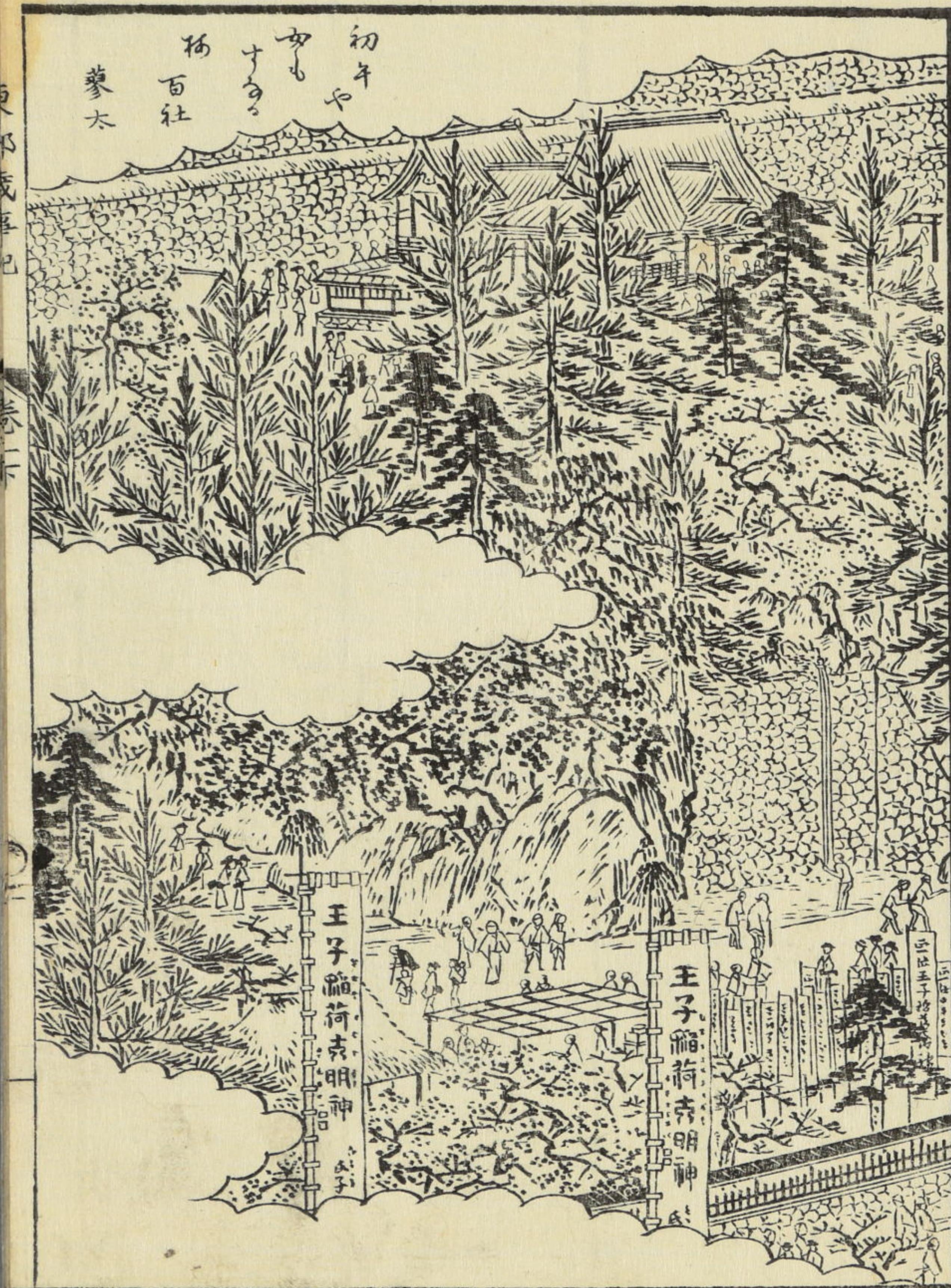
○ふの名小虫取山重安寺像と併せられ

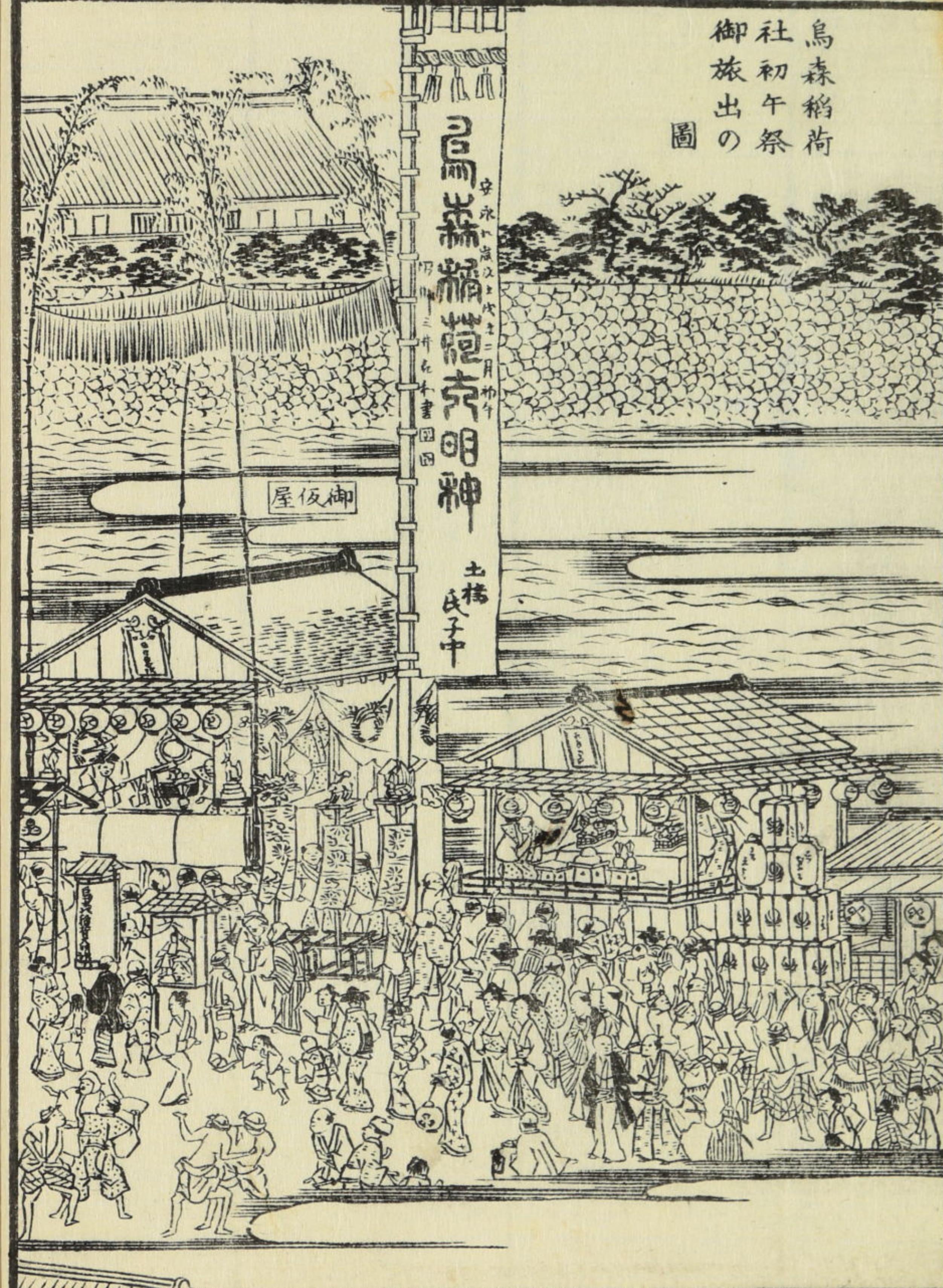
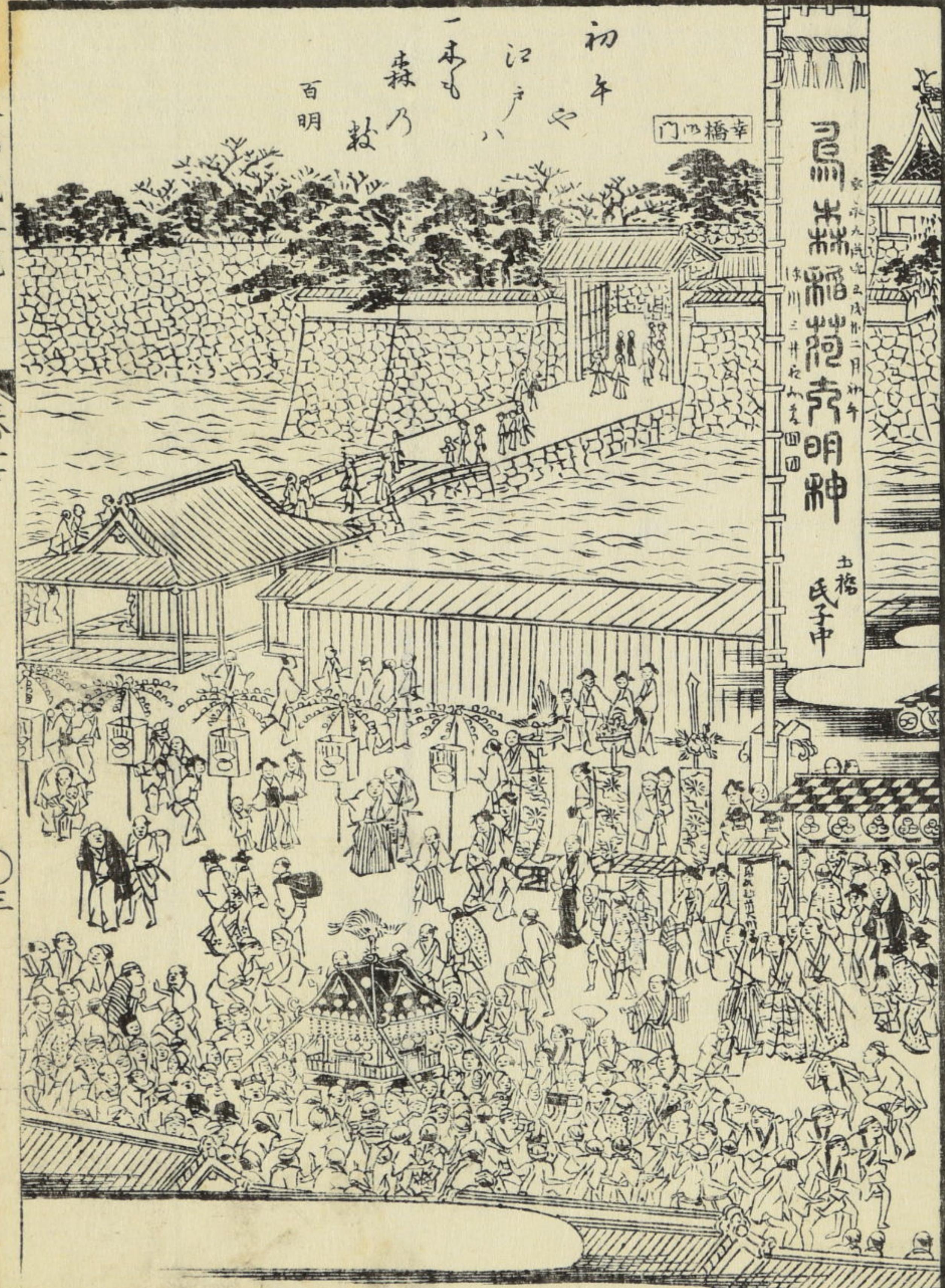
初午○江戸牛鷄高祭前日より縛り 江戸ハすべて鷄高祭の社験マサニ、或家

社効法せざる者御一家の社あり市中五町に一町に

常帛とさけ市中を走る

桃灯





羽蛇としりくの彩の幟ホ達つゝ林あひは佐野村上とさけ修業林宣と清て法事に又
男兒相あふ集りて終幕鼓^{ツスイ}響きを。かは無りと号して鷺翁が法事湯。りも小き紙よ已う
名ふと記し。これとよりて多くいとひは族彌よ多く仰ぎも中人以下の然あり。林田紺屋町
の辺へ多よ小官を居と迷りて高ふあく。佐々木町といふは月分て買入キテ東京鷺翁の姓をあふ
あらじゆくあまくときひあにハ主雄多と譽る已矣よ方う一通り。初年の秋が絶する太鼓商
人街トキニ

王子鷺翁とりよりあ日より訪人群とあは
因比谷鷺翁源助町と芝に二丁目の宮本の様中宿へ旅籠と儲けく付裏と延び初年乃
ありか一宿りお地灯懸ふる日落町の通り行燈よ奉工まと
あはれ産子ハ芝に二丁目同不引町次第之角御多源分丁等アカリ 鳥森鷺翁山田氏初年の二日
があり幸橋寺門外へ旅籠と補ほして清旅出向り同日産子町に付裏と改め初年の翌月夕方よ改裏
の糸ちの付舟とあは産子ハ二条町若房町橋田傳あ町同和泉町コクホウ
同渡河町もあり舟のあは市中鷺翁至乃壯観なり
少旅生きて 桜の森鷺翁タウカ 不川 小網町
緋ヒラハタ 桜の森鷺翁ヒラハタ 後
同 不渡炮洲鷺翁 福徳鷺翁淳世 小路
同 司方鷺翁 本銀町
太田鷺翁シタヤ ト谷鷺翁トガ 割高
西法院 境鷺翁トガ 本銀町
柳森鷺翁クマカヤ 柳原隅手筋
柳の鷺翁クマカヤ ち町

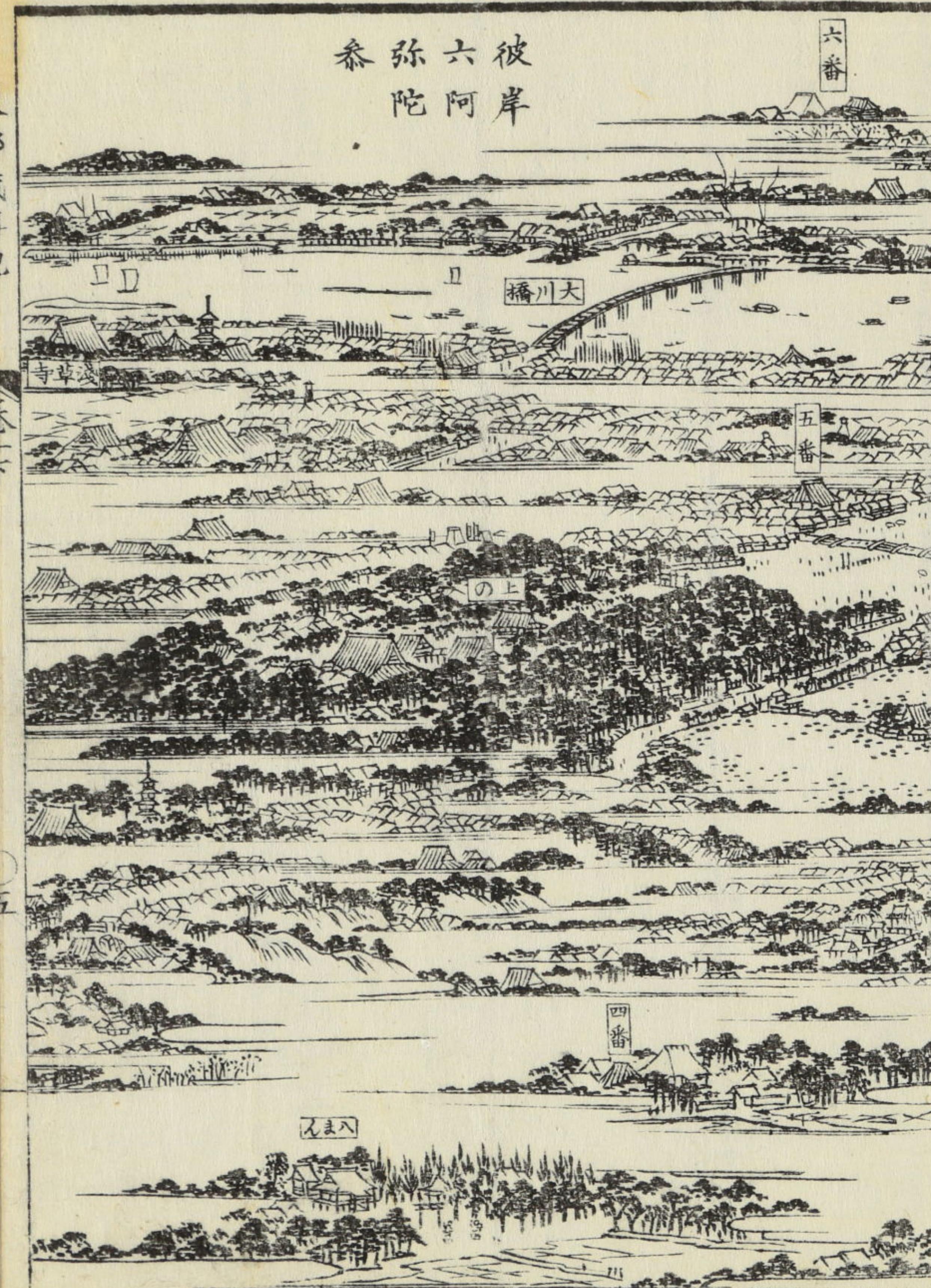
鴨荷 同上
鴨荷 本巻院通尼
鴨荷 沙茶
鴨荷 太郎鴨荷 沙茶
鴨荷 袖擣鴨荷 沙茶
社名枕打とより
争弱く娘アリ
谷付よ
二子不
三の鴨荷 本山ミササ
元町ニ鴨荷 沙茶
ち田室泉も今古例の奉神の
或又二十入度のうち無沙茶アリ
世能鴨荷 坂田町カスミザ
中坂 露山鴨荷 麻布スラブ
橋内 増治
市谷八幡 花園鴨荷 同上
花園鴨荷 又ちつりと云
坂 二回稻荷 紫色眺望ヒ
坂町 ウヅナヨ
鹿代鴨荷 場上 カサモリ
砂 マツサキ
高崎鴨荷 橋 ミナガリ
生智鴨荷 村 ヤマサキ
皆田鴨荷 地 之園鴨荷 牛勝利處
ミササ
葛西金町。法炮洲和泉橋をあらはせ
と避れトマスル。あら中のん減税も鴨荷の往來で感得の富津と稱せしも
ミササ
之鴨荷ハ小川町おな構造去手ふゆり付懇湯とて砲瘞の件事と施を附。正月元日
より二月初午迄切手と申二の年の自業とあは寛承の結果若ふうりて始りトソリ
初年やをつりよかすむ多う筋立園へまろ年や江戸ハ一本も參の数百明。初年のこれが
や半の清あまく柳居 古原の初キ「初年や賽せんよまき芝居うち其角

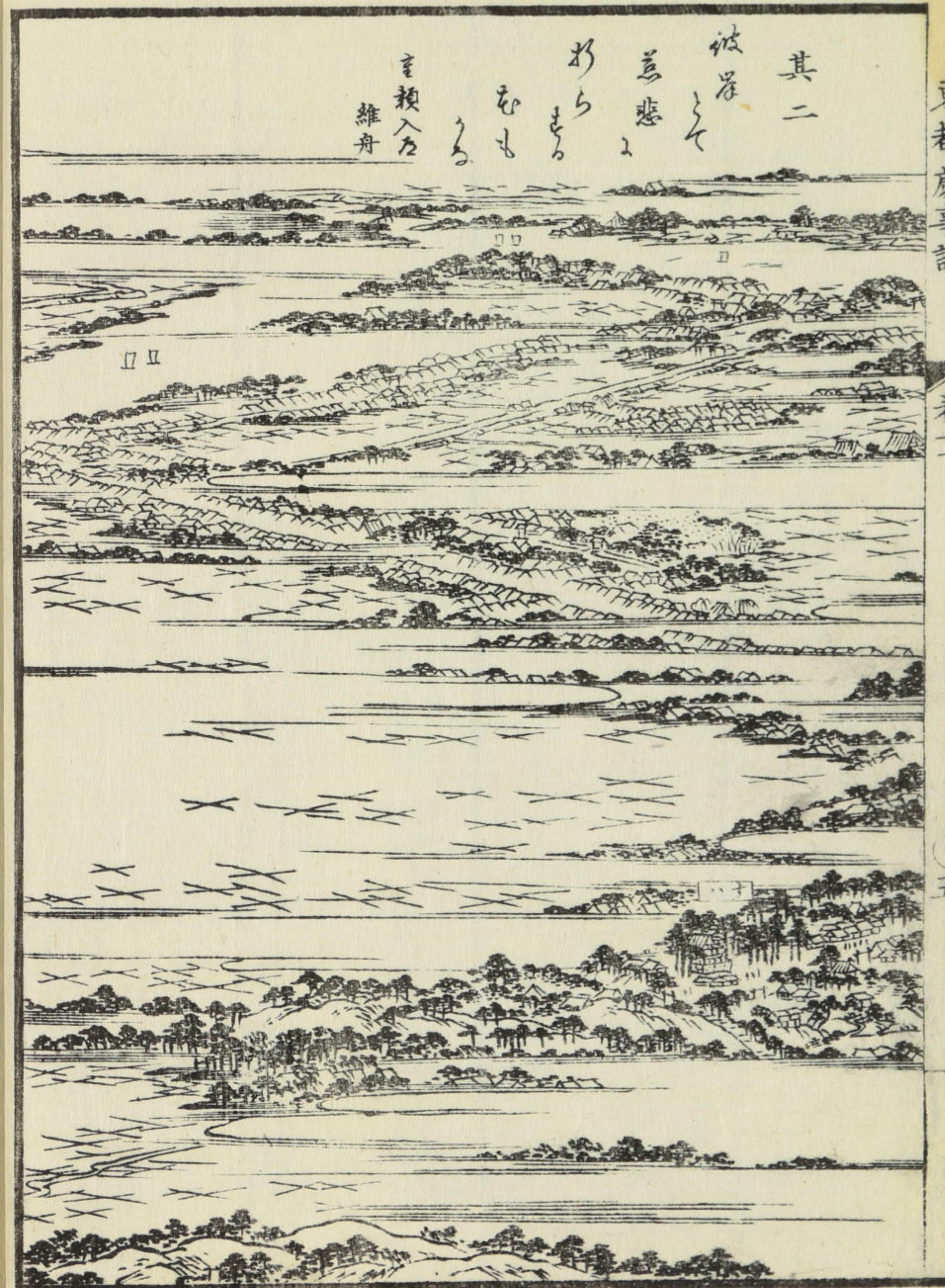
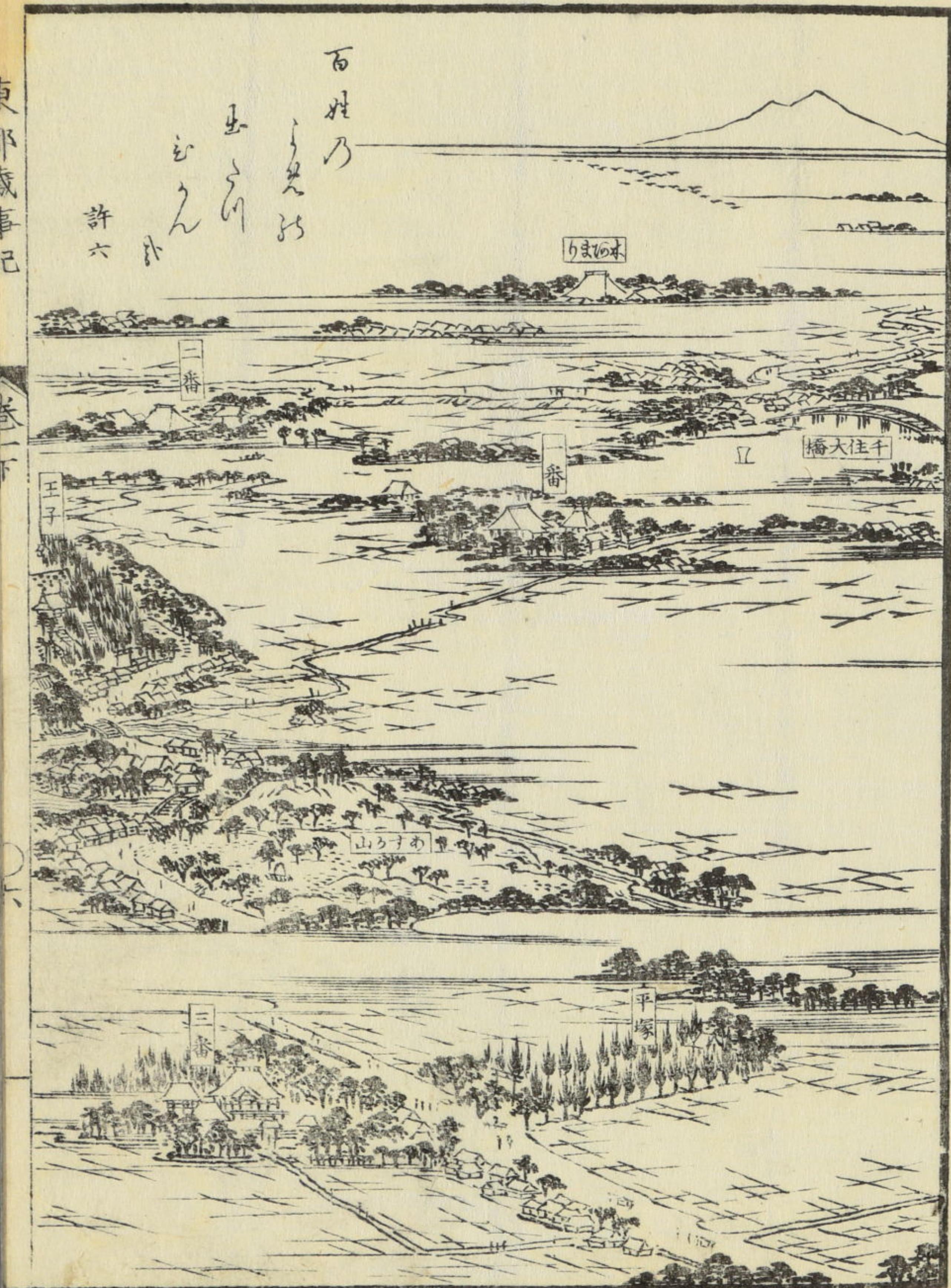
○今日より清水堂へ百歩ありとては者多くすれに移船を以る由云か、ソナリ
 ○け月小児を智達事の師通へ入つサリし者も一ノ子より寫いシメ多錦荷山^{ミヅ}
 二年二年○古例ふたり又ハ初年の日をもくすり、ゆまし、今日のありがとび不ありを云々多く
 明乎ハ大うき初年小純行入り
 ○二年日登坂功運も鶴荷神事無行ひ長境内太本の寺あれ様大うき聲あり
 ○二の年の日十谷茅町境鶴荷多れ也宝慶十一己未までハ隔年も神事と後一茅町二用
 三日四教高尾町上野大門町池上櫻町新町根津門五町同之承町湯治鑑安寺^{ヨウジヤン}同御院
 門あ以上九町より十一番の御神り物を半々タク同十二庚午神事より立派一安承二
 午多よりハ神事も出る事とす

波崖○春の初日より二日よ
 申ら日既初日より
 七月の宮諸寺院佛事と經一魂法事成す
 申候多遠矣一信事少くも仁ふ信義一修小禪毛
 ○六阿弥陀堂^六終よりに於基井の船入り
 波崖中都郡の信久^{タマ}波崖

六番 下谷廣小路^天 大樂院^{田畠} 田畠^{六丁} 一番 四樂院^{田畠} 田畠^{六丁}
 二番 烏う京^玄 安量寺^玄 安量寺^玄 二番 田畠^{六丁} 一番 上豐原村^{田畠} 田畠^{六丁}
 二番 下浜田^玄 六番 乘戶^保 常光寺^保

文城村性翁も休院如來の像ハ河基井と源流院の本尊を送りゆく所あり世俗有病す
 の源流院より源田延命院より三宇子佐町へゆる去る所あり^ハ源流院巡礼の事ハ^ハあ





高寺へ詣づより「百體のトモア出で川被峠ウヌ許六ツミテム御事ナタ
のヲ被峠ナ其角」

○山の手六所御院春 春秋の被峠高寺より

海ああ生試喰モ

一番 四谷門外ノ学モ

恵心傳

二番 同大通横町福念モ

聖種李子
御姓

三番 喜山築壁横町高傳モ

因太子

四番 同百人町善光モ

中裕郎
御姓

五番 同通ノ保町梅窓院 聖種李子

御姓

六番 赤坂一ツ本移泉モ

御基并
御姓

○西方六所御院春 春秋被峠中西方ニキニ所銀世モトヤリハ
東詣御り御法モアヒテ喰モ

一番 痴久保 大養寺 運

春日

二番 板倉クモリ

安阿波
御姓

三番 二国田丁目春林寺

春日

四番 高輪鹿車堂横町高覺モ

御姓

六番 白金 正源寺

春日

七番 同恩 林天寺 恵心傳

御姓

○奥深浮き寺ハルム仙系

○西方井熱持モハ法大师東園門あり

○西方三十三所觀音札所系

被峠中高達寺一間に唯頭とあらば
よアリツツタラシカレバ

二番

あま下考夢院

因傳中あ夢院

三番 むか下天祐寺

六番

浦池ヨリ陽泉モ
六本木崇義モ

四番 金年寺大泉寺

九番

六本木圓福モ
さく田

五番 六本木源廣寺

三十一番

さく田圓福モ
林念モ

六番 一本松下

三十二番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

七番 一本松下

三十三番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

八番 一本松下

三十四番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

九番 一本松下

三十五番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

十番 一本松下

三十六番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

十一番 一本松下

三十七番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

十二番 一本松下

三十八番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

十三番 一本松下

三十九番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

十四番 一本松下

四十番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

十五番 一本松下

四十一番

一本松下
さく田圓福モ
林念モ

同仲月正時 ○塔上モ 海原も山と同き法入登るもばゆくにて
八月半六日の如
同仲月正時 ○塔上モ 海原も山と同き法入登るもばゆくにて
八月半六日の如
上垂法多觀音坐放生會

○小石内牛天界境肉身と洋モ秋の被峠モ同

二日 ○伝法越後より同奉あり住へ一ま公人主事の職とゆそゆへゆ

四日 ○法華家義士四十セ人の忌日なりも輪泉忌もよ墳墓へ高寺より

報と來り晴びく

同仲月正時 ○塔上モ 海原も山と同き法入登るもばゆくにて
八月半六日の如
同仲月正時 ○塔上モ 海原も山と同き法入登るもばゆくにて
八月半六日の如

上垂法多觀音坐放生會

○小石内牛天界境肉身と洋モ秋の被峠モ同

二日 ○伝法越後より同奉あり住へ一ま公人主事の職とゆそゆへゆ

四日 ○法華家義士四十セ人の忌日なりも輪泉忌もよ墳墓へ高寺より

報と來り晴びく

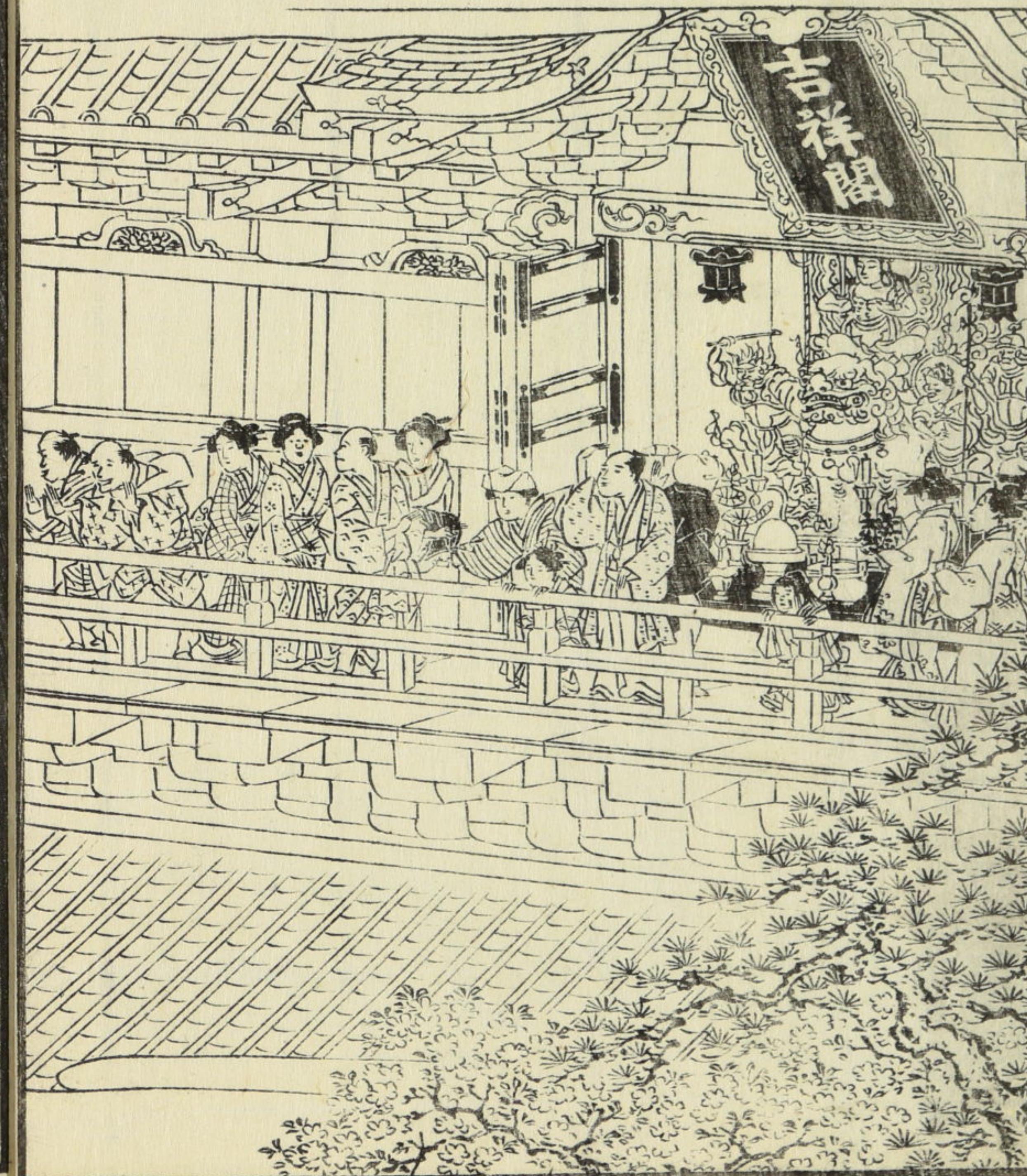
二月十五涅槃
會の日東叡山
文殊樓上登る

圖

東者歲事言

卷二十一

七五

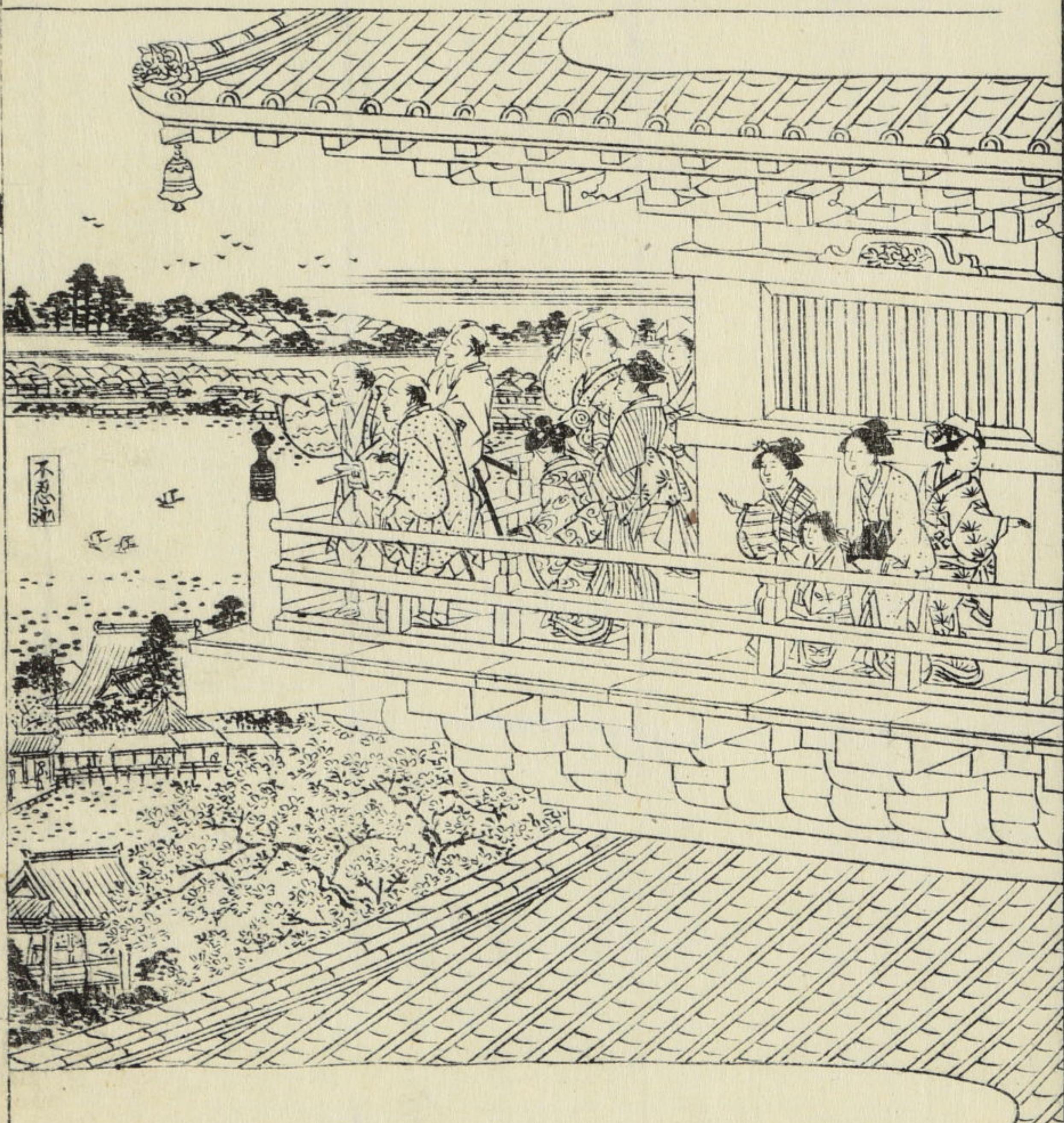


春日登東叡

高閣

凭欄偏訝履空
行愁眼與春俱
快晴紅日映檐
扶御膀望濤吹
壁畫仙瀛千林
花氣眾香國萬
戶入烟舍衛城
安得開携善財
手昆明却外話
無生

六如菴



六如庵詩鈔二編六

謁義士墓

君辱臣死分所當生同吞炭死同墳古來一人得猶難况乃四十七豫讓

八日○正月奉納め家へ範目落と竹の先ふ付て處よ小立ふ

或も予始

十日○湯沸天満宮落別處見院九日より落葉群集を休憩と往來より居てゆき又神主と無行を彦子の町に松灯懸をすむより正月

より一う室水みよより正月より

十一日○牛込京町幸國もお詰女一日延修

九日説法十六日延生会よりの日を普照師
正月夜放生會音東鬼供奉の外執事

あり廿二日みを施縫鬼より

十六日○秋月涅槃會諸家子ジニエ勤行東収山常行堂

二川堂のたけまかり御もん
本堂が故く修行より

本堂

勤行

涅槃會

本堂圓向院

増上寺

本堂

修行より

本堂

涅槃會

本堂圓向院

下谷養玉院坂本少行り今自掛るところの付也涅槃會

大場護

本堂

涅槃會

本堂圓向院

涅槃會を墨画にて特種安住の筆あり世ふ稀にも大快すてときあるも

御もん

會の時本堂の後へ足代と絶て掛り一う風氣の多くひらるる處を

芝田町六丁目裏繋後も小走後も

御典

の画も御もん像とくろを餘修る院音執行より不化

○今日立本中も西門の屏風と替へ立着て仰ふ供毛

○今日東収山増上寺沙糸も山の登樓城ゆく

正月十六日

のおり

南郭文集登吉祥閣

吉祥層閣倚蒼穹宮殿爭高此地雄似叩天闇朝北極應觀世界住虛空

彩雲近傍諸陵出玉樹斜連御道通一自飛來稱驚嶺長懸日月照山東

同佛滅日上三緣山三門

黃金閣上苑白馬創東京待闢三門鎖登驚百仏成太虛通帝坐眇麗壓

乾城王氣深凌勢官陰徹梵聲練明迎海霽綺錯繞都平煙煖邑花早日

遍林鳥輕仲春傳佛滅萬古會羣生自力恒沙盡俯觀品類情

○小日向腋部坂詠興奇法花經の文字少て画るべ百羅漢木画幅掛る正

十六日○象小河り○吉田穴八幡宮神樂無行○曰谷天教も電鶴翁教也

○堺町中むら勤行布度ゆるけ日芝居始く無行の日なりとて一座のりはとく事也

元年甲子二月十六日中持少行く無行ノ久古例あり今天保少行て二百餘年小多へり

十六日○本而一月矣天堂琵琶會

小集會一琵琶と彈し平歌と通り末刻より

尚社を元保の以於山檢校信一の勤行よりあは檢校相別にのちの無行天教取計術の物

と泊り元保の娘おゆもはゆと洋領し慈檢校と給へ尼波戶慈檢校の娘ありとく御道

家の中興と祐モ今日京師へ象坊門の小清聚庵少行盲人集會一妙善天の画像あり其體乃

画像とうけて琵琶會行あり傳へり

人王卒年四代仁和天皇第四の皇子と人康親王とする

又天教の少子ともやまる

せよ光孝天皇の子とゆるハ陽りをと因

い眼あひさせぬひ貞親十四年壬辰

二月十七日丙午年十二日ゆく薨逝ありじか子育人と憐せぬひと勾当檢校とりへ坐びのをと聲

ゆりへとあり今日も西洋忌の遠教あるより報恩のみあれこととあ一又翌十七日

に秦河承少也て桂塔會とくらやどかすとくふほすもこれふくらひて今日びも忌減行

より仰て多款の駆遣の如きは勿見かく説是國ありて洋々

かすむ

○西月半旬より江府の酒肆白酒と送りて草ふ中やる送金町を橋底の酒席から女日付

終一約小商へ走をとり求めるに致しくあつより戸外市とあせり

女一日○萬西下達田妙徳ち聖徳太子寺

女二日○沙茶矢傳慈眼院聖徳太子像用帳四十才の自作なり

女三日○慈惠天満宮御忌神事 今日も法性坊の高僧の忌日あり當社もは供正の是社へ

女四日○慈惠天満宮御忌神事 今日も法性坊の高僧の忌日あり當社もは供正の是社へ

女六日○慈惠天満宮御忌神事 菩提津忌よりて經行を二十三日より三日の齋あり

午時社人拂枝と拂花の作詠二十八首披瀟を同教會の割より神人被服と爲し神戸ノ

拂車にて苑中とめらる式經りそのもの神乐と奏一鹿鳴と焚く次第の如し

松明仕丁十八大お舞仕丁三人青白幣 布衣え簾火仕丁三人巫火入鬼形鳥帽子精衣神戸太孫正

立鳥帽子鬼衣金妻ね仕丁二人乐奉鼓仕丁三人乐人鬼鬼一人模尚乐人鬼鬼一人司勢職法裳大薰

布衣二人童子一人お手すり仕丁八人

○ちる輪東禪寺に管神主筆の清経と掛く事せしも 清酒と歎する所も 神教必赤しといひ

今日庭中見ゆどよりて ○鶴町平河天満宮舊作高年の清経と相せしもを多か

○茅場町中生御旗和肉天満宮 神主諸井氏 白金花城天満宮天満宮牛巡様も町天満宮

等在 ○女七日を猶近海翁も施瘡神社大般若

十郎店前町 尾張町 人形町 沙茶茅町 沈の堺仲町 牛込林坂上 鶴町三丁目

芝作の房 元緑の勢麻子は牛込の離市と傳せり今ハ即

女八日○足川南番場本光も開く忌日付上人の忌ゆり

○西月の東公家虎清系向あり

女九日頃○紅毛人六年小一度京府 びんを入筆者一人紹合二人より西月の東公家

登 城を古来ハ毒年ありつゝを來八年よ一反とも又うびん筆者の外より外科を人來り

し乍も文政以來改りて二人とすれり素人來朝の始ハ景慶十九甲辰年ありと定て名猪布引

とく

○白魚 沙茶川の名めあり初度湯もあり二月より川へ入二三月以すと砂石の写る生い

子の子秋からりて流しに浦に入て生長はとくと尙十一月の東下すあり

波巻梯○立葵より六 东収山 山王 东坂 二丁目の本坂側 伊新町入に 金院

南ふのまくらひの者 令ふたりて吉世の南巻梯を一處とせ 築のあら金院雅

俗に牽り花下に遊宴して夕照の鉢をと膳もあらにまほせば紹トと離さるをうひ

美秋の頃より外ゆくは風情多し 菩峰文集より採う筆の邊山の様、羅山草堂載をす。由紀り

枝巻梯○因る東収山 坊仲よ 谷中自幕里 金院雅 金院也 經王も木太郎も金院西寺

ヒララニ

墨田川堤
看花



湯河驛洋院

根津權現社 小石川傳通院

本寺のあ

大塚護持院 度尾

光林寺 麻布

成子家家も 大木

中聖宝仙も

光林殿 同思林天也 沢生本守

大木本坊乃

あ少何り 聖坂功運も 玄外寺院ふ事

草辨櫻

同六十日 め満月

東叡山

山王

吉祥閣の傍

に軒も町林中

青草坊

谷中七面之境內

駒込吉祥寺

小石川白山社北壁櫻

大塚護持寺

コガ子井

小金井櫻の裏岸

江戸より七里余あり、高木の櫻、宍永の首枝させぬい歟。庶亭保

里餘支崖悉く花木列りて、春時爛漫、うるめきも單辨中にて、殊々潔白なり。

一里餘支崖悉く花木列りて、春時爛漫、うるめきも單辨中にて、殊々潔白なり。

小金井櫻の湖柏庵とりて、是名、一里餘支崖也。

江戸より多摩川より風毛と賞、一年魚と波へへ地の名産ゆゑを矣。

味味やく半日立

立葉を半日

立葉を半日

江戸より多摩川より風毛と賞、一年魚と波へへ地の名産ゆゑを矣。

味味やく半日立

立葉を半日立

立葉を半日立

立葉を半日立

同立葉を半日立

立葉を半日立

立葉を半日立

立葉を半日立

立葉を半日立

立葉を半日立

立葉を半日立

立葉を半日立



遼櫻 ○ 因一 東叡山 清多石坂のと圓木本観院

車坂の邊

花櫻の一枚榜ふたりて日並と深を上あしに記せ一ハ因木もと日並ありま蟹と見んとすと
あきとりかく終てきり揚よ限らば開花の時作大概定りあれども多の事暖ふとよりそ
かーの遼遠あり又種類ふたりても花底あるる處一も一山とぞ一もくとしきりと等へと足
る多所ともほろよもにはばれハ寒よ大とと番く〇或人云快頬毎ク擣ふヨ載フモハニ有九
分今赤武三ハ百余石ヨアシトヒ

〇花のば多峰高曲の師道門下の童子幼女と集つて花ヲ以てかゝる又至る庵の花見上野日ノ出し隅田

川をとむき一ト考の師と車中やむの見嵐雪

櫻茶 ○ 立春より年 トツサ坊中 平井

支地むく秋葉の多喜種の茶葉あり

○荒波山を生 慶窓本集は云古人云く我亦云日本ニ千余門の名松數度覽の多よ誇

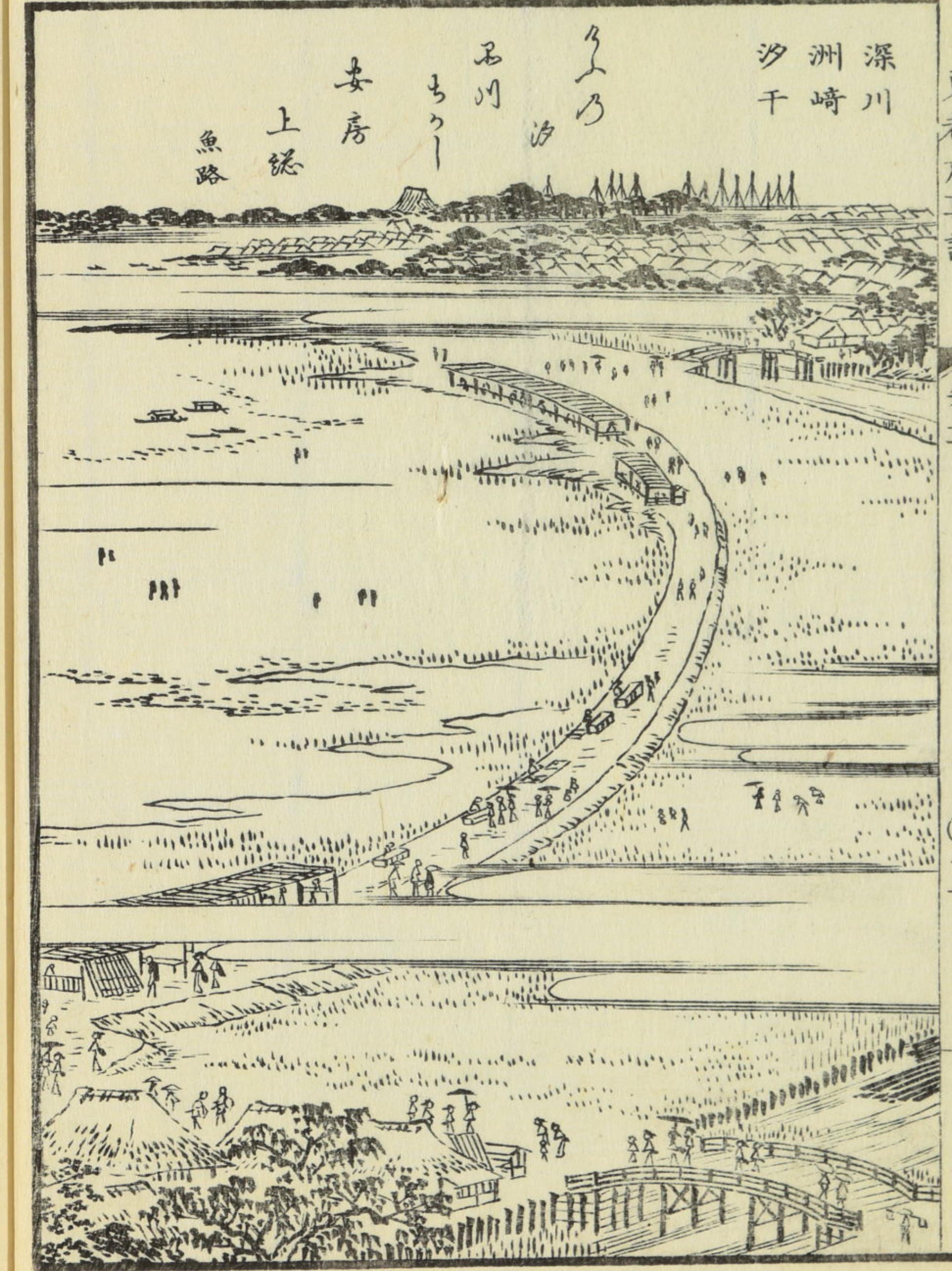
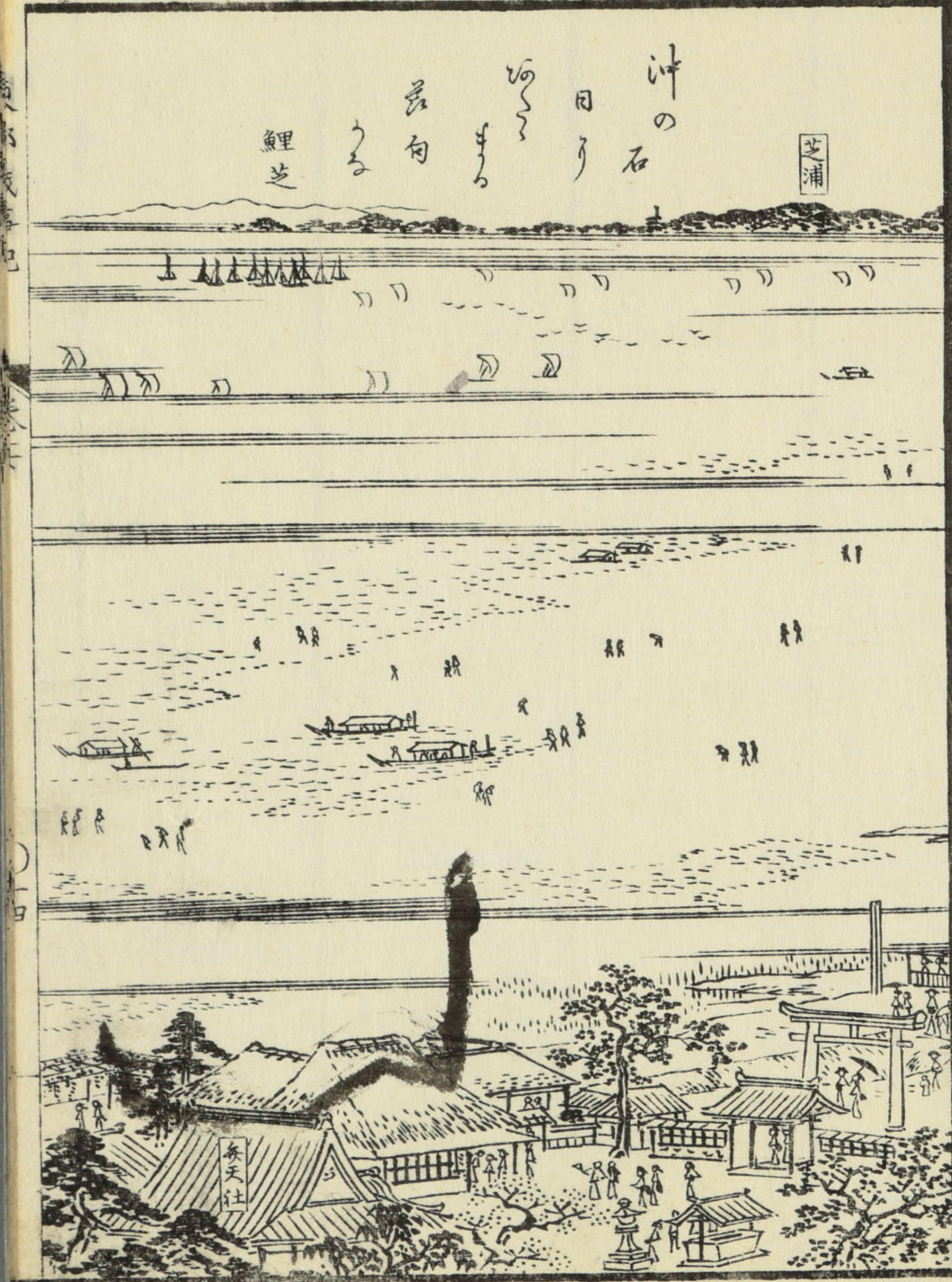
小字 けも園より東ハ乃と申とて八分の美ハ士峯武此隅田荒波の空氣と冠とひとひより来日隅

田川亦荒多山日暮里の寺をむ従事より 亂とひづのまもくたの荒波やま 大坂淡々

二月

朝日 ○ 芳蘭陀人集府の年今自完城せーうを東ハ自定りかーたすく見あき

ア芳蘭陀もあくまかふたりるり 鞍芭蕉



○商月中吉原仲の町渡還く橋と船
と舟すり舟もよ映して一入うちも一橋と
橋よりは先延ニ己巳の春より始り一月一月補助席子にたり〇江里の宿舗繁昌よりも今も
けは方客日暮よ群集一月先來等陽の夜もよみづれとつねるもおれ女房多ふ重
こありあにてたゞまづらよモ一二入り萱洲散人の詩よ

多少ノ紅粧祭作霞五一街春一色聞繁華相迎更賞清芬好各自爭攀解語花
りくに京ハリカクもくろの酒乃よもくま
居つけ乃秋風をもきて揚が中を深め人を絶へもくよやうりて揚が雲を深く分
引のきりのまほそ蝶も揚るかな花坐

松葉や湖川

風きく井とひくもくの水廟を湖川
國かくみの候はきくら揚ぐる無度日不

さうくの風きくれつ漫遊のむ松葉や湖川
ちりあんでもひくもくや小室日も扇

三日○ト已卯祝依諸處游登城良縁佳節と祝モ

艾腰桃花酒白酒炒豆

あと以て時食

○女子離遊二月のまどり廊下よ既とままで拂ふあり高才の
女子ある處や初の角向とてかて終人

○今日同窓甚あると於て離人形と拂ふあり書面ハ詔文ノ編輯の名不思議ふ

○滿月亥家多云の女子有り又ハ森入とぞ處より拂ふと申らば

○汐干滿月より四月より五月之日と前と後南風烈一ノれは海風甚るなり九潮波の暴風も
よきよきとて天よ遠く又是度ひて遙遠ゆく月の太きもと一生一死一或人会今世

よ約自とてはうの海と船する、大波の波かく数日止前と満と見て可かりとく

芝浦高輪赤羽沖佃崎沖深川洲崎仲川の沖の沖より御日止前と満と見て可かりとく

○引接い年の年割りとあ塵隣地と事もよしにゆうとて蛤蛤と拾ひ砂中のむらぬ波
やく引鉤りくる波沙よ小魚とて宴と催せり
同川よ富士のうげかき汐干即開指みを集永代時八まん丈ま納の向よ
因千尋り身のてあるき次第見其角一ノ駒すむひく坐とすまん波千うな全
國のもの崩つりはますて汐干うな全

○今日本田橋市外模擬院原の園とねせらるを邊の男女老稚日毎とお詫一摘系と接り

かとて歩一むきの内ハ宣方と聞

四月六日○奉公人出替々 今日僕婢回主と拂して移よほは江戸を去人代りのゆふあ

二月二日より一月の間庚午年丁酉正月十八日のとちよよりて今年

三月六日よ出代りすとよ一公より出仕詔ありまづらひて三月六日よりとぞ

九日○ト終ふ冲山法華經寺承役十八日延修行ひる者乐もあり江戸をまわる

○源川山前津山の法花經寺役十八日よりて修行

○今日不十一日延世経村高光と切響上人報恩達を哉一於下より来請事

十日○廿一日迄同上八十石の軍ム法大師巡釋 八十四番二田院主院下施のりよ
次てもうよ一二の修ようもらひて
空路凡二十里の余ありよいもまよのとて是空路と記もとの如

一番 二本枝 正覺院 半番 三田亭 泉福院 八十番 三田亭 大福院
合番 三田亭 脈玉院 古善番 三田亭 佛慈院 半番 三田亭 大聖院

廿七番 雨門院

六十番 曜日 宝生院 八十番 曜日

廿七番 雨門院 六十七番 菩提院

十九番 あさひ 因福院 廿一番 菩提院

十八番 まこと 永代院 六十八番 津河

十二番 白ひ子 美譽院 七十二番 同前

六十八番 在赤目 永代院 六十九番 在赤目

七十三番 さるえ 美譽院 七十三番 在赤目 永代院

四十番 本赤目 在赤目 永代院 六十番 在赤目

四十一番 木下 金剛院 六十一番 在赤目 在赤目

五十二番 石井 大護院 六十二番 在赤目 在赤目

五十四番 石井 不動院 六十四番 在赤目 在赤目

五十五番 天王寺 西福院 六十五番 在赤目 在赤目

五十七番 明王院 自性院 六十七番 在赤目 在赤目

五十九番 菩提院 朝日院 六十九番 在赤目 在赤目

六十番 菩提院 不動院 六十番 在赤目 在赤目

六十一番 同前 在日光院 六十一番 在赤目 在赤目

六十二番 三さき 美譽院 六十二番 在赤目 在赤目

六十三番 天王寺 朝日院 六十三番 在赤目 在赤目

六十四番 瑞應院 在日光院 六十四番 在赤目 在赤目

六十五番 朝日院 朝日院 六十五番 在赤目 在赤目

六十六番 朝日院 朝日院 六十六番 在赤目 在赤目

六十七番 朝日院 朝日院 六十七番 在赤目 在赤目

六十八番 高田 砂利場 六十八番 在赤目 在赤目

六十九番 在赤目 在赤目 六十九番 在赤目 在赤目

七十番 本作 大護院 七十番 在赤目 在赤目

七十一番 本作 法華院 七十一番 在赤目 在赤目

七十二番 本作 不動院 七十二番 在赤目 在赤目

七十三番 本作 法華院 七十三番 在赤目 在赤目

七十四番 本作 大護院 七十四番 在赤目 在赤目

七十五番 本作 法華院 七十五番 在赤目 在赤目

七十六番 本作 不動院 七十六番 在赤目 在赤目

七十七番 本作 法華院 七十七番 在赤目 在赤目

七十八番 本作 法華院 七十八番 在赤目 在赤目

七十九番 本作 法華院 七十九番 在赤目 在赤目

八十番 本作 法華院 八十番 在赤目 在赤目

八十一番 本作 法華院 八十一番 在赤目 在赤目

八十二番 本作 法華院 八十二番 在赤目 在赤目

八十三番 本作 法華院 八十三番 在赤目 在赤目

八十四番 本作 法華院 八十四番 在赤目 在赤目

八十五番 本作 法華院 八十五番 在赤目 在赤目

八十六番 本作 法華院 八十六番 在赤目 在赤目

八十七番 本作 法華院 八十七番 在赤目 在赤目

八十八番 本作 法華院 八十八番 在赤目 在赤目

八十九番 本作 法華院 八十九番 在赤目 在赤目

九十番 本作 法華院 九十番 在赤目 在赤目

九十一番 本作 法華院 九十一番 在赤目 在赤目

九十二番 本作 法華院 九十二番 在赤目 在赤目

九十三番 本作 法華院 九十三番 在赤目 在赤目

九十四番 本作 法華院 九十四番 在赤目 在赤目

九十五番 本作 法華院 九十五番 在赤目 在赤目

九十六番 本作 法華院 九十六番 在赤目 在赤目

九十七番 本作 法華院 九十七番 在赤目 在赤目

九十八番 本作 法華院 九十八番 在赤目 在赤目

九十九番 本作 法華院 九十九番 在赤目 在赤目

一百番 本作 法華院 一百番 在赤目 在赤目

大進夜詣とて(る)茶飯又室戸八十八番ハ宝脤の内法圓山の上人本院にすてて移す事とすり
○芝居^{シラヤ}山内子の聖茶礼用帳○虎島外京極家の膳食外而もあんひら禁
十一日○ト谷稻荷社奉乳別處西法院古來ハ二月廿一日より寛政二年冬月より元の在社のあとまへ馬院
産子の武家町屋を後モ林糸絆二本軍神牙座參ス坐せりかく御子立花庄内里より武家此より山中絆
公^{ヒヨウ}よりは未納^{スル}也^テ左近^{ミナマツ}立花庄内里より先へ下が^ス木村門^{ミタケ}同前^{ミクニ}通じて春日院のあま坂町より因^{ミタケ}後^{ミタケ}
東町同^{ミタケ}二丁同^{ミタケ}切手町を左^{ミタケ}へ坂本町より江坂にて志^{ミタケ}院と同明町の写^{ミタケ}を高^{ミタケ}加^ス
庄^{ミタケ}城^{ミタケ}より風坂下を下廣小路近事^{ミタケ}走^ス向^{ミタケ}より南へ下谷町ト疊町を上逆町と同明町の写^{ミタケ}を高^{ミタケ}加^ス
先の下谷町^{ミタケ}より木社へゆきあり〇又久保野下谷町同東坂町神田平永町小柳町ト下谷の代地
やして元^{ミタケ}山社の産事^{ミタケ}ゆきあり〇既^{ミタケ}今^{ミタケ}もゆうらんのがりとゆき^ス神酒奉^スおどり^スて縁^{ミタケ}入り
寛政の書既^{ミタケ}大の如^{ミタケ}各^{ミタケ}一^{ミタケ}塗物とゆく^スなり

一番 上海子二番 久保野下谷町平永町三番 神田小柳町四番 同平永町五番 同八新町六番
大者町續東坂町七番 同二丁目九番 同二丁目九番 上海子御東坂町西法院の事十番 下谷

大者町續東坂町七番

卷二

廿七番 雨門院

廿七番 雨門院

廿七番 雨門院

廿七番 雨門院

廿七番 雨門院

三月十四日
新鳥越念佛院
來迎會

北五軒の遙供養
ありを年より
行事絶えり
かへ



桂林集
菩薩

源直朝

うらうめ
すむ月乃
ひづれ
きのうけ

東都歲事記

卷二

東坂町十一番 同山陽町十二番 虞風坂下東坂町十三番 神田三軒町下谷六軒町十四番

下谷橋南町十五番 下谷邊處處第六番 沖東幡隨院つあ水と女附り

○源河縣江摩利支天冬々神水無折○治乳山聖天家燈油修折

十六日○下谷宗延も法華經を教女二日延修折 王の写園帳女三日喜乐

○不川南畠物浦桂も決し氣味○下山坂村渡修社年紀前高森峯也

○今朝自源河寺光院中詔修會を被る懶く載きとも今いゆか一

十七日○涉糸影寺越念化院法會ハ今絶えり中ね法如尼の志ふよりて御ノと修會り

秋羽南麻禪林の例ふからて来連金とひづらき御本堂の御本堂と並み二千八百五十九枚とけ井の山手と庭園事坐とあへ御修會あり一月は法會絶てより卒金集会をめどり假面もより一月の日年半にそぞりをめどり

十八日○本芝御穂 二丁目 廉勝 四丁目 池

あ徳義常

別寓本終院十日より後より

花

出し大懶拂打拂船より

産子ハ本芝寺丁目二丁目三丁目に丁目本芝入横町同トク町同村本町あちり廉勝の母も

佛も除えて佳系の化なり

○隅田川木母も梅若様大念佛

今日も梅若毛忌日よりて修會もとくら

出花天とてよごと墨り又ハ五色のすありもの日あらむと梅若が源のぬとひゆうを

主膳の慈廟子云萬福群集して被毛すの御梅若毛の様もむれと聲も風情もく

娘より梅若ハ十六日そひされかと古人のじゆも宣ひり翌日ハ説める人もあく寂然と

して香の表は波の音のとひくへ密延のむくと小て今へまよまよう當時整思の地もあり

て殊更ものむろは終雅俗とく日毎ふまほか遊賞しをまたりてもかく佳景

十九日○同慈膳の幽日也 せか已來因美の年漏多ゆひ人今自作無ニ基源渠

大川筋へ出花川とよの名の宮とり陸へよりて隨身門より還裏ありて重訪古事坊

神樂とも渡もあの日意例とてて下木森寺の村もより様おとせり被毛の漢人ありて

作善城修業をむすべ戸川の辺より漢人様も太歎歩へ移る御よやく人とをまよふ

方ありを除諸方の羅師船を供養し又産子の町よりハ少一遙御車小若美と云ふ一時の

性親とあひあれの町へなまなの如く 但一茅町を丁目と稱り迎の場所と定む

○番 莽町を丁目二番 尾町天王町三番 旗筋町を丁目二丁目も番号片町四番 番 番

町五番 並木町草加町六番 沢形町七番 佐訪町八番 之宮町九番 田原町一丁目二丁目三丁目十番

東仲町十一番 和仲町十三番 南る町かる町十四番 枝木町十五番 花川内町十五番 山ノ内町十六番

聖天町十七番 聖天権町十八番 金移山下尾町十九番 山谷湯泉町廿番 田町を丁目二丁目

以上二種を町なり

○源河縣内令源院多喜の作業○源河細丁の生産井泉以下都とさん賀社業

三月十五日
木母寺
大念佛

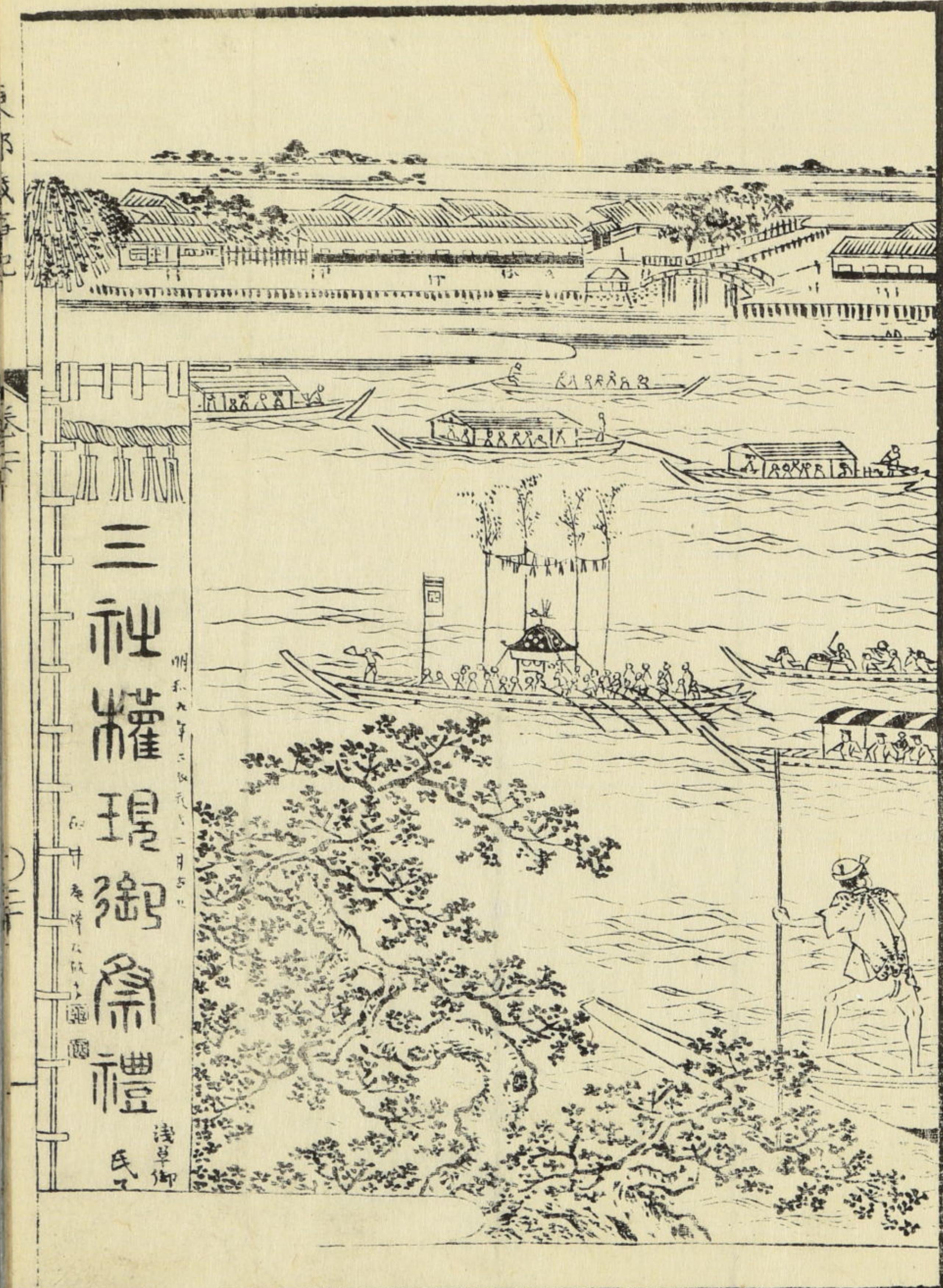
阿兒何處去柳絮
古江濱猶自春風起
年々飛著人

南郭

柳
人
乃

波麥

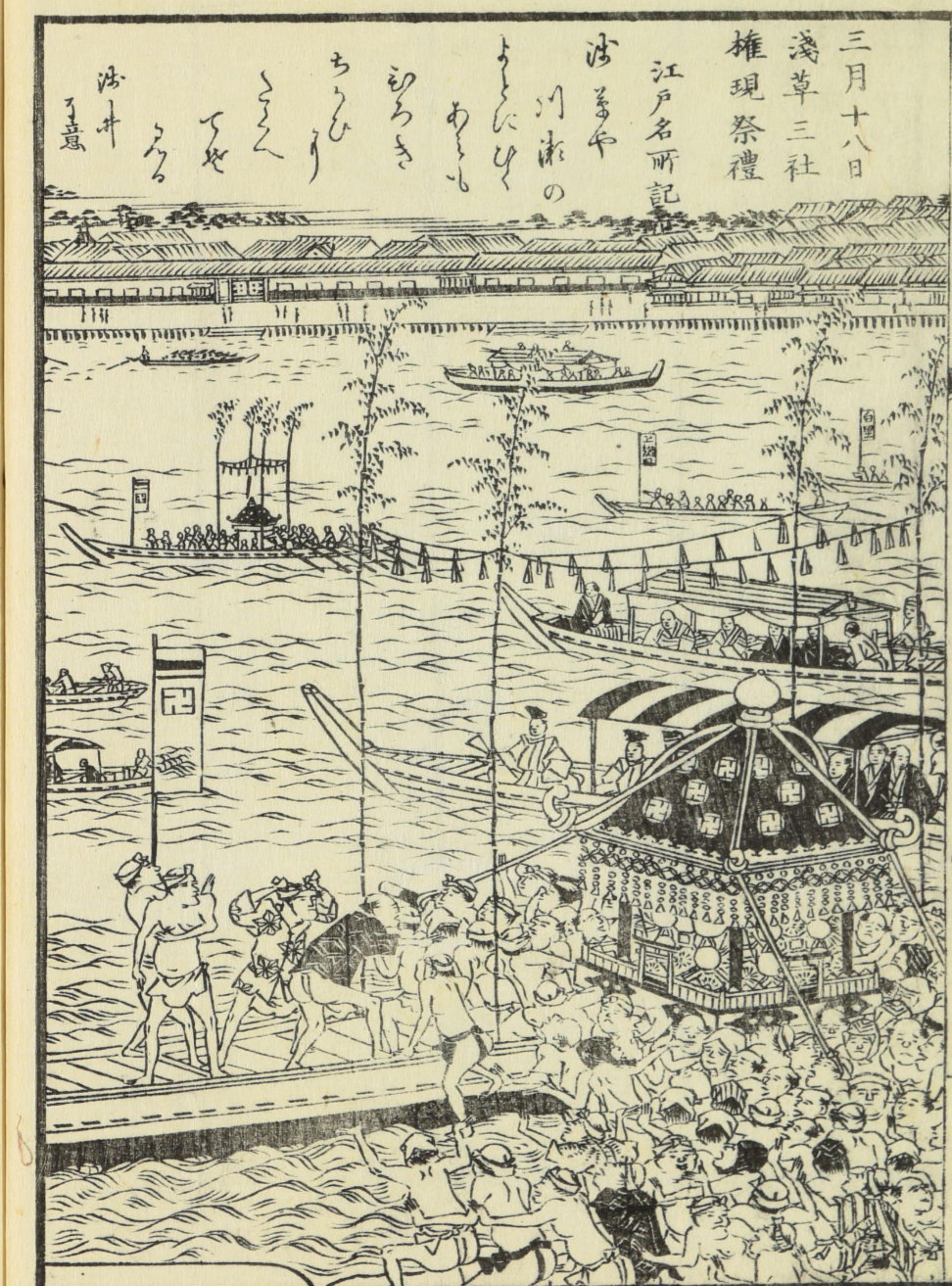




二社權現御舟禮

氏

明治九年二月
東洋文庫藏



三月十八日
淺草三社
權現祭禮

江戸名所記

東都風土記

九

○二月法修も万福院經也八日まで修作 俗の影響隨

十九日○涉事も雷作つて蓑市をよりもの所多く甚也てはあみを高へ

○作と本の法華經手部廿八日近修作 あの写真帳奉行

隔年奉行も毎十八日市立つ

○源川本堂も圓光大师御忌廿八日近○小石川上坂地蔵も同日廿八日近

廿月○飛戸天満宮奉神樂無作

廿一日○吉言宗も院寺修作修作 法會と以て奉宿あり

川瀬大師奉写も

廿日より廿二日まで開帳ありとま法

二本松正貴院も度に開帳あり

白根高野山

祥集も此の據ひと方かくに

アシナガウラ

三田明玉院も新井川村惣持も

川瀬大師奉写も

放送會

今日護持院も開

川瀬大師奉写も

毎日より四月十八日近度中是爲もありま

あり見爲とゆる

川瀬大師奉写も

とて清淨供 本不二ツ同修勅も

あら依頼に

本不二ツ同修勅も

中興室也も

あら依頼に

本不二ツ同修勅も

谷原村長命も

と稱も

ひむくあり故てより信人矣

主余江大師安室の院も十日のうち又祀也ハハ不ありと見て知るべし

○今明日本不羅漢も圓山忌法會 圓山後眼禪師の忌なり

廿二日○吉輪を照る太子坐也○今日中興室也も光頭殿玉砂か物修作

廿三日○根津権現社奉神乐興行○幸山玉窓も御者方根君修造百味供表

廿八日○小日向 上み 本法も蓮如と人御忌法會廿二日より修作 あの写真寫

ひむくあり故てより信人矣

廿八日○高麗品川子體花神祭也 例高湯也モ廿七日より修作

江戸湯也モ廿七日より修作

○高麗品川子體花神祭也 護摩作と修作十一月も多れあり

○高麗品川子體花神祭也 藤原院利休忌 お前の人集会して蒸の湯の七日より修作

○け頭より夏よりて諸侯のも院是法事作英竹家もと京都より

ち院の境内よがて開帳あり 日数ハ半日と限らず本田向院ハ都下より

もこゝきて無昌せりも写境内令銀米穀の少くか一様くの送りよけり也概拵打本多納あり

カイキウモ限送り有○法花字の院もも湯屋もまち御跡も源池如來總御院と號すあり第ては

伊勢も多聞院ありま余同宗のも院もも湯屋もまち御跡も源池如來總御院と號すあり第ては

芝今秋十月もへより蓮座へ移りてよりもう町と經て開ちゆうのち院へお参りを

ゆを東の向うアカリ

み元集 手この春秋或いのものはよりまも具神具化君よりのゆとりにて奥慶の

御威現あらゆる中よりも當初の開帳ハさうねづらとれどもれて官守鄙るのさうひ

暑とあやまし雲丸は風の隣もかく蟻の如くふまうててと人形程のをとと过處に尋

涉て同まもはまよんりうよひ水乃下向た

其角

○勧進相撲 スマフ 去冬ニよりあよし晴天十日うちもはの境内よ於て興行を田向院とす一の場不とほる除茅塙町茶師源川トまん丈芝愛宿社地よりすの御所寄角力と号けに至る時月よりて晴天六日よ興行を主催ありて三十七年は経せばが寛文元年壬申年考官よえて奉ひ興行アツラウよりお續て今より興行アツラウより古今お撰大全より興行アツラウよりお續て今より興行アツラウより

○書画會 アツラウ 金門下の子才とよく席上とからて毫と走るる一絵半幅ともある

橋より充満する泰年の筆アツラウにて文華の如きと看るへ一又立葉浮花程が琳派

○法衣衣冠會 アツラウ 淨端程小限の法を除むるの藝人アーティスト小忍てモ師匠う藝と稱を率すり夏と家とす

○走るる御警古のくめふるよ敵おく府外の仲間は説一或ハ群集のくめふるよ程のををそそのり制限の達速と聲て般練ハシラツともうじよやものほりてわたく遊説の輩乃物とぞすり

○桃 アツラウ 立春より七十日後スカハラ 六七の湯アツラウとゆり太師

○桃堂 アツラウ 大藏蒲田山中園中 カーラ 河原へ行ひ桃林アツラウ 関田河の堤 上野坊中

物景

谷中天王寺 アツラウ 中野桃源アツラウ 余命ふらりて極アツラウて方一里余紀白尼アツラウ 伏見
とく芭蕉の句アツラウ ひ老矣の地ありとく今へや。○源川立宮坂川垂りよ首桃木多々アツラウ

梨花 アツラウ 立夏アツラウ 七十アツラウ 生麦村 アツラウ 川宿の下総八里の邊 アツラウ 市川の向アツラウ 有不^{アツラウ} 里あり

櫻堂 アツラウ 四月 アツラウ 大藏蒲田山中園中 カーラ アツラウ 仲教 アツラウ 同士十八
桃 アツラウ とく大藏アツラウ とく大藏アツラウ 河原へ行ひ桃林アツラウ 関田河の堤 上野坊中

木下川葉師壇内 年牛壁大官裏アツラウ 連アツラウ と外名不^{アツラウ} 事

高田山吹室アツラウ 人の名ふありた田石浦の故ゆあり世人をとどめか暗也

鶴鳴霧海 アツラウ 立夏アツラウ 七十アツラウ 松船アツラウ 有根津権現境内 息星鷦鷯アツラウ 日暮

里修性院妙隆アツラウ 底伴 大久保百人町式かの底伴アツラウ 大本 深井棟

屋の内而くよひり 良木とつゞ霧海の名アツラウ 有根津の名アツラウ 有底伴アツラウ 教株を種アツラウ 一時乃

福乳山 アツラウ 大塚復元アツラウ 石坂アツラウ 白 アツラウ 木川東海も然ちのあ石坂アツラウ 大本

漁繩 アツラウ 春嶽アツラウ のと波戸アツラウ 有根津の名アツラウ 有底伴アツラウ 教株を種アツラウ 一時乃人共よつてよし乗組アツラウ 有根津を約り世とよ派布アツラウ 有根津の時竟温涼風氣該時海乃清濁よりて舟乗組アツラウ 有根津の宮と之方を時割と



古事記

逃水

ニゲミツ

もぐりの魚類なり。ちかくまくすり、夏より秋より、鳥城、八月肩より八九月
ひゆ豚、八四月中を先拂、老ハ六月肩より拂、と參元、約を候。豚の時より、始く多き、あまく、約なり。
或の流より拂しるやうなり。かくまく、あまく、約なり。又向の方より、流り、あまく、
逃みの名ありと。或云、冬のうち、よりて、八月に拂、或の時より、まく、あまく、
人をもぐり、ねぎとこまく、ひりとこまく、どもりと、りのまく。首筋、くらる、系所の筋、くらむと今、
人畜田島と、かくして、まく。

夫木

ひつまくに、ひりとこまく逃み、乃ろけられても、世、絶すとまく。

後毅朝臣

